



若者へのメッセージ 56

下掛宝生流能楽師 安田 登

【第二回】時を掴む、身体が解き放たれる

何かをやってもなかなか進歩を感じない。そういう時は、自分の内部で大事なものが静かに、ゆっくりと動いている時間。

何年やってもなかなか上達しない。どれほどやっても上手くなつた気がしない。そういう人のために中国の古典『論語』の言葉を紹介しましょう。

稽古のあり様

『論語』は西洋の『聖書』のように大切にされてきた中国の古典です。紀元前約五〇〇年に活躍した孔子という人の言葉や行動が書かれています。

切磋琢磨や温故知新など『論語』からできた故事成語も多いのですが、今回は文章を紹介したいと思います。

まず、その文章を書き下し文で読みましょう。「学びて時にこれを習う。亦説ばしからずや」

文字紙に書きながら、読んでいってください。原文は次のようになります。漢字は旧字体で書きましょう。

學而時習之不亦説乎

【学】まねぶ身体

「学」、旧字は「學」です。上の「白」は両手を示します。両手を使って、学校のようなところ（一）で、子弟（子）に手取り足取り何かを教えるという姿を表したのがこの文字です。

上の真ん中にあるシャープのような形は「爻」で「カウ（コウ）」という音。これが「ガク」に変わります。この音の示す意味は「マネをする」。「学」とは、手取り足取り教わり、そして自分でも手足や全身を使って何かをマネすること。すなわち「からだを使った」学びをいいます。

孔子たちの学校で学んだものは主に第一回で書いた六芸です。皆さんが書かれている「書」もそれに含まれます。孔子の学団での「学」もかなり厳しいものだったでしょう。

「学（學）」から「爻」と「子」を抜き出し、これに「支（攴）」をつけたという漢字が「教」、いまの「教」です。右側の「支（攴）」は手に鞭を持った形です。教育の「教」とは、鞭を持つ

どうですか。聞いたこと、ありますか。中学や高校の教科書に載っていることもありますね。

江戸時代の儒者である伊藤仁斎は、この文章を「小論語」＝小さい論語と呼び、この文がわかれば『論語』すべてがわかったのと同じだ、とまで言いました。それほど大切な文です。

ちなみに現代語訳すると「学んでは適当な時期におさらいする、いかにも心嬉しいことだね」となり、あまり面白くない。それよりも原文を一文一文字、一文一文字読んでいくことが大切です。書を道とされている皆さんですから、ぜひ一文一

てピシバシと打ちながら教えることであり、「学」とは鞭で打たれながら何かを習得する、厳しい学びでした。

【而】呪的な身体時間

次の字は「而」です。「そして」という時間経過を表す文字ですが、この字が怪しいのです。

この字は、巫女^{みこ}の長い髪だという説と、男^{おとこ}巫の髭^{ひげ}だという説があります。巫女も男巫も雨乞いをする呪術師です。「而」の上に「雨」をつけると「需」になります。「需」は「求める」とも読みます。「雨」を求めるから「需」です。そして、それを行う人が、人偏^{にんべん}がついた「儒」です。孔子の一派を「儒」といいます。孔子の一門は、「雨乞いの術を身に付けていた巫祝^{ふしぐ}だったといわれています。そんな呪術的なイメージを持った語が「而」なのです。

むろん、ここでは「そして」という意味ですが、この時間はただの時間ではありません。何か変容するための呪術的時間であり、錬金術的時間です。

「全然進歩しないな」と思っていて、少しやめてからもう一度やってみると突然、上達しているという経験、ありませんか。それは表面上は進歩が見えなくても、水面下ではしっかりと進歩しているからです。その目に見えない上達の

時間、それが「而」なのです。不思議な呪術的な時間の経過です。

【時】時を掴む

次は「時」です。

時の右側は「寺」。上の「土」は古くは「止」と書かれていました。下の「寸」は「手」です。

「止」と「手」で、「何かをしっかりと掴む」という意味になります。

時間はどんどん流れていきます。その流れ行く時間の一瞬をガッと掴む、それが「時」です。

ただの時ではない。「まさにその時」をいいます。つらく苦しい「学」が続く。そのつらく苦しい時の果てに輝く「時」がやってくる。それをガッと掴まえる、それが「時」なのです。

【習】解き放たれる身体

「時」を掴んだあとにするのが「習」です。

「習」の字の上は羽、下の「白」は手偏^{てへん}をつければ拍手の「拍」になります。「白」という音はパタパタという擬音。「習」は鳥がパタパタと飛び立つさまを表します。

長い、長い、本当に長い稽古期間がある。先生は全然OKを出してくれない。つらくもあるし、自分には才能がないんじゃないかと思ってしまう。ストレスフルな日々が続く。そんなあ

る日、先生が「よし！」と言ってくれる。それが先生も生徒も時をガッと一緒に掴まえた瞬間です。「もう羽はたく時だ」そう言われる。

能ならば舞台に立つ。両手を開いて、ゆったりと舞う。長い稽古期間を通過してきたから、もう頭でなんか考えなくても体は自然に動く。お囃子^{はやし}の音が体の中を通り抜けていく。その流れに身を浸しているだけでいい。

まさに悦楽の瞬間なのです。

何かが静かに動いている

何かをやっている、なかなか上手くないかかと感じる時。その時でも、自分の内部では何かが静かに動いています。それを信じて、ただひたすら続ける、それが大事です。

それが芽生えるのは、早い人も遅い人もいます。遅い人は、早い人を見て「うらやましいな」と思う時もあります。

しかし、遅いというのは内部で動いているものが大きいということです。私のしている能では、その人の進歩を数十年単位で見ます。若い頃は全然ダメだったのに六十歳を超えたら突然、上手になったという人もいます。そして、そういう人は名人のように上手になるのです。

自分の内部の動き、それを信じて、ゆっくり、ゆったり構えて待ちましょう。